

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

【氏名】土井 清美

【所属】(助成決定時)

東京大学大学院 総合文化研究科 超域文化科学専攻 文化人類学コース

【研究題目】

現代欧州における徒歩をめぐる言説の変遷と身体感覚の理解: 文献とフォトエリシテーションを用いた社会人類学的研究

【研究の目的】

現在、交通の利便性が飛躍的に発達するなか、徒歩の意義が見直されつつある。ヨーロッパ中世以来長い間、徒歩移動はキリスト教的受苦と救済を体験する行為と関連づけられ、産業化社会以降、健康増進、精神的充足と結びついた言説へと変容したという論が一般的な考察だが、未だ徒歩に関する社会科学的不いし民族誌的に裏付けられた緻密な研究は極めて少ない。

これまで報告者は、キリスト教を信仰しないにもかかわらず年々増大する反復的なスペイン サンティアゴ徒歩巡礼者に関して、参与観察を中心にその誘因についての研究を進めてきた。その結果、出発時は到達すべき目標であった目的地の重要性は、徒歩実践の過程で移動手段の重要性に挿げ替えられうること、また、かつての観光人類学的議論の前提であった文化的・社会的に構成された「他性」ではなく、時間的深度をもった身体と場所の直接的な関係が「また訪れたい場所」の感覚を喚起すること等を理論的かつ民族誌的に明らかにした。

この成果をふまえつつ本研究では、フォトエリシテーション調査とより広範な資料を収集することにより、現代の欧州における徒歩をめぐる言説の変遷と、後年の言説の生成に何からのかたちで関与するであろう現在の徒歩実践の動態を整理することを目的とする。

【研究の内容・方法】

サンティアゴ巡礼が隆盛した中世の巡礼記録および 1940 年代にまとめられた民俗的研究書、国際化の引き金となったフランコ体制崩壊後の観光産業の顕著な拡大が見られる 1980 年代から今日までの新聞記事などをもとに、徒歩に関する言説の変遷を整理した。このことにより、サンティアゴ巡礼における徒歩がどのように認識されてきたかの通時的概要を探るとともに、欧州統合、金融危機などの政治経済的「欧州」という枠組みで徒歩の言説を捉えることの妥当性を検討した。また、経験的語りの聴き取り調査について、社会科学および文化人類学的調査ではさまざまな試

みがなされ、なかでも予めインフォーマントに撮影してもらった写真を基に聴き取り調査を行うフォトエリシテーション技法ないしフォトプロジェクトング技法は、「記憶」を具体的に把握する上で有効とされる。現在、この調査法には多様な手続きと解釈があるが、申請者は、予め調査者が撮影区域を定め、その写真に写り込んだ事物・人物に関してインタビューを進める一般的な技法に限界を覚え、2008年より過去の研究蓄積を発展させながら、写真に表象された特別な出来事よりも、撮影者と遭遇する事物とのあいだにある審美的・権力的関係を探る方法を探ってきた。本研究では、各国を縦横に結ぶ越境的トレイルでありなおかつサンティアゴ巡礼路の一部区間(フランス サン・ジャン・ピエド・ポー～ログローニョ、スペイン ポンフェラーダ～サンティアゴ・デ・コンポステラ)を調査地とし、過去の調査方法の改善点をふまえながら、何らかのイメージが喚起されたときにシャッターを押すことを依頼し、問題の所在を「何を撮ったか」という対象に置くのではなく「その瞬間に何を想起したのか」という具体的なイメージと事物の繋げ方について各20件の聴き取り調査を行った。

【結論・考察】

サンティアゴ巡礼路の徒歩に関する文献資料にみられる歴史的な言説の変遷と、巡礼路において写真を使った経験的語りの調査によって明らかになった世代間の偏りとのあいだには、興味深い関連性が見られる。それは、文書記録や撮影に必要な知識や機材の限定性が、大衆化によって緩むとともに、徒歩が、既にある価値付けられた史跡を確認する行為から経験の直接性を価値付けする行為へと向かっているということである。大きな流れとしては、中世のサンティアゴ道を辿る旅人の記録は、いわば重要事項の「見聞録」が中心であった。その言及は20世紀中ごろには巡礼に関する習俗の記述へと広がり、20世紀末にはオルタナティブツーリズムというかたちで国際的に徒歩旅行(トレッキング)が紹介されるようになった。他方、世代間にみられる撮影行為の違いには、(撮影枚数が限定されるネガを用いた)アナログカメラに慣れた世代にとって、撮影とは「記念」すべき瞬間であるが、デジタル写真の撮影に慣れている世代は、より「ささいな」瞬間にシャッターを切る。もちろん、何かを探索する行為としての徒歩の意義は歴史を通じて変わりがないが、すでに存在し価値が与えられているものに「到達」したり「発見」する手段としてあった徒歩は、自身の身体を用いてしか「遭遇」しえない行為のひとつにもなりつつある。これらのことから、近年のサンティアゴ巡礼にみられるような徒歩のムーブメントは、「欧州」という既にある(地理・政治・経済的)枠組みのなかで捉えるよりも、膨大な情報をオンラインで間接的に閲覧できる今日において、直接経験によって生じる出来事を希求するあらわれとして理解できるのではないかと考える。